

平成二十年度

四月三日

辞める顔入る顔あり四月かな

花吹雪デートの二人舞ひおちる

四月五日

こんな日は空で春眠してみたい

四月七日

介護士と野球談議や春の宵

四月九日

病棟の友へ藤の薫届けたし

四月十日

薔薇燃ゆる炎のごとき恋したき

四月十五日

補聴器を通し囀る我が耳へ

我が友も車椅子の身花は葉に

山間の残花一本我が目引く

四月十七日

恋といふ魔法にかかり春の午後

四月二十日

ひげ剃りの上手い介護士だんごの日

行く道の話題の一つ植田かな

ひばりの忌こは港の十三番地疲れる

四月二十三日

句心と食欲満たす筍飯

四月二十四日

一歩でもメロンに近づく貯金する

山本海苔店応募作品

甘ひ甘ひメロンのごとき二人かな

山本海苔店応募作品

メロン食べ遠き北路を思ひだす

山本海苔店応募作品

抜け出だせぬ便秘のような巨人軍

四月三十日

昭和の日ギターのばたやん知ってるかい

春の雲掴んでをりしシャベルカー

良き人と巡り会へたる春の午後

五月一日

若葉光句座の畳に照り返す

五月四日

安らぎと涼しさ求めて映画館

母の日や笑顔絶やさず長生きを

五月五日

遮断機に遠足の列真つ二つ

五月七日

青嵐優しいヘルパー怒り顔

五月九日

良き友と初夏の陽浴びて城跡へ

古井戸に初夏の日差しを集めけり

五月十二日

アパートや屋根より低いこいのぼり

格別な乙女と共に新茶飲む

ガソリンの価格気にして初夏の旅

五月十三日

二宮像笑ふ校庭初夏の午後

五月十四日

初雷に君との夢も途切れけり

五月十五日

夏場所や思はぬ一番飛ぶ座布団

これだけは負けない母やらつきよ漬け

五月二十一日

幼な子のけんかの理由はさくらんぼ

句作りは小さな幸せさくらんぼ

山本海苔店応募作品

五月二十二日

駅弁も一つの楽しみ秋の旅

駅員の礼儀正しき爽やかに

交通総合文化展応募作品

交通総合文化展応募作品

蜘蛛の糸見れば思ふや芥川

NHK俳句応募作品

五月二十三日

女子バレー五輪を目指す汗の顔

ハンドベルメールの響く初夏の街む

五月二十五日

歌謡ショー演歌のリズムで青葉揺れ

五月二十九日

ワイパーの点検忙し梅雨近しむ

五月三十日

青ひ目と子らと激走初夏の午後

夏木立困んでをりし城跡かな

六月一日

口元に涼と甘さのわらび餅

六月四日

時の日や時計のごとき来るヘルパー

六月五日

格別な入浴の後の氷菓かな

信号を待つ間に溶ける氷菓かな

六月九日

あれこれと水着に思案五輪かな

梅雨晴間ビオラの響く交流会

恐ひほど君の乳房や更衣こしもがえ

六月十日

介護士を目指す少女や汗の顔

六月十一日

省エネで団扇の波が多くなり



サングラス外し介護士の顔となり

六月十二日

紫陽花や君とデートに色添へて

涼しさと野菜求めてスーパーへ

六月十六日

紫陽花にどっと埋もれ車イス

お金かけ時かけ紫陽花名所へ

雲の峰真横にしたる展望台

夏の旅出てきた雲に感謝する

六月十七日

友の忌の近づく頃や五月闇

六月二十二日

夏至の日やすることなくて尚長き

青ひ目もそれに染まりし濃紫陽花

ほくほくと新じゃが出たるデイサービス

六月二十五日

介護士が夏風邪押して仕事へと

虹消へど二人の愛はいつもでも

夏料理何か不安を持ちながら

六月二十六日

良き人と別れ惜しむ夏の夜

六月二十七日

エアコンの風で風鈴なりにけり

七月六日

夏の風邪癒へて句心また湧きし  
病ひ癒へそうめんの味尚さらし

七月九日

この暑さ十七文字で書けぬほど  
七夕や乙女は何を願ふやら

七月十一日

バーベキュー煙吸ひこむ夏の月

七月十三日

街中を祇園太鼓の響きけり

駅前活気戻りし祇園祭

カラフルな乙女の浴衣目を奪ふ

七月十四日

ざわめきが耳に残りし祭後

七月十八日

なにかも少しばし忘れて花火の夜

知らぬ間にその輪に入り盆踊

流行の歌に合はせて盆踊

七月二十日

終戦日平和を語る紙芝居

この平和永久に続けと終戦日

七月二十七日

願ひ事知る間に消へし流れ星

若者のロックで暑さ吹き飛ばし

帰省の子日時を知らず電話かな

義妹がくれし半袖涼しげに

誕生日ケーキに色添へさくらんぼ

七月三十日

夕立がもたらす風に安堵する

この温度どうにかせよと蝉の声  
お茶飲める喜びかみしめ原爆忌

八月四日

甲子園汗と涙のダムとなり

八月十日

秋暑し北京五輪に昂りて  
たかぶ

この国は秋といふもの忘れたか

八月十四日

ローカル線秋風のみが途中下車

爽やかや見知らぬ乙女が微笑みを

秋暑し魚もぐつたり水族館

八月十四日

介護士と五輪を語る秋の夜

八月十八日

秋の海見ながら友と昼げかな

なんとなく夜毎夜毎に秋の声

八月十九日

休暇明け土産話に花が咲く

盆休み時の軽さを感じけり

八月二十三日

感動を与へし五輪爽やかに

秋の雨日本野球の涙とも

八月二十六日

こんな日は部屋より外に秋の午後

コンビニののぼりにつられとろろそば

八月二十七日

名月やあなたは僕のかぐや姫

月よりも君の瞳の輝きし

八月三十一日

自分史を読み返しをり秋の夜

九月二日

稲光り首相辞任のニュースかな



九月三日

新米の一粒一粒友の愛

口中に季節の梨が広がりし

秋の雨友の病の気になりし

九月七日

秋暑し北京で燃へる障害者

吊るし柿見れば思ふや母の里

柿の色夕日に照らし尚赤く

九月九日

食の秋乙女と外食箸進む

お米まで不安をかかえ食の秋

山本海苔店応募作

山本海苔店応募作

九月十日

秋場所や大麻が汚す土俵かな

しんがりが一番目立つ運動会

九月十一日

秋晴れや音楽が結ぶ二人かな

秋晴れや恋のライバル一人消へ

めでたさや花野を歩む二人かな

九月十五日

初恋を想い出させるぶどうかな

九月二十二日

あてもなく男二人の秋の旅

九月二十三日

秋うらら電車に揺られ一眠り

テレビ塔真上に泳ぐいわし雲

秋雨を上手くくぐりて旅終える

九月二十九日

運動会終えて風のみ運動す

大臣の三日坊主や稲光

君といる時間よ止まれ暮れ易し

十月一日

秋雨の止みて良き日に恩師行く

十月三日

この頃は男の仕事大掃除

ダスキン大掃除の川柳応募⑬

大掃除している君がなほ綺麗

ダスキン大掃除の川柳応募⑫

大掃除すれば出てきし探し物

ダスキン大掃除の川柳応募⑪

十月九日

ノーベル賞日本連発実のる秋

十月十一日

ごひいきの巨人優勝実る秋

十月十二日

子の笑みが健やか示す七五三

十月十三日

友笑ふメタボ腹かと食の秋

こんなにも両手にどんぐり子が笑ふ

介護士も今日は売り子と秋祭り

十月十七日

母今日も愛犬連れて日向ぼっこ

愛犬がキスする二人見る夜長

山門に何を願ふか秋の蝶

十月十九日

たっぷりと演歌を聞いて鳥渡る

秋祭り余韻残して眠りけり

十月二十日

子のバンド愛を奏る秋祭り

介護士とクイズ楽しむ夜長かな

十月二十六日

いち早く汁粉味わうデイサービス

汁粉より甘き口づけかわしけり

十月二十九日

秋冷へや一際欲しひ君の愛

十一月三日

秋祭知人の顔もちらほらと

介護士と祭気分をたっぷりと

十一月十日

冬の雨巨人ファンの涙とも

十一月十二日

小春日や新郎新婦晴れ姿

十一月十三日

幸あれと祈るも神は留守なりし

十一月十四日

冬陽浴び誓いの指輪輝きし

十一月十六日

一人来てやがて輪となる焚き火かな

公園をそれに染まりし冬紅葉

十一月十八日

もう書けぬ恩師の名前年賀状

旧姓で書きさうな名前年賀状

十一月二十七日

流行り風邪しばし句心奪はれる

十二月一日

病院の聖樹彩り癒される

十二月七日

クリスマス二人は愛を確かめる

健やかな事が何より年新た



十二月十一日

建て前の雪降る如く餅や菓子

思ひ出を共に消へゆく古暦

十二月十四日

年忘消ゆく演歌我守る

十二月十五日

幸せは君と飲みほす雪見酒

初デート別れの時も雪が舞ふ

十二月十八日

おーいお茶呼んでも一人冬の夜

12/17雪のラブレター応募

12/17雪のラブレター応募

12/ 伊藤園おーいお茶応募

十二月二十三日

持ち歌を全部使ひて年忘

十二月二十七日

我影も共に山門初詣

つかめないウナギのような恋心

うなぎ

十二月二十八日

甘酒を君と飲みほす雛の夜

甘酒

十二月二十九日

餅つきの音に思ふや母の里

地球といふ畳に眠る四十億

畳

雷に叱ってもらふこの政治

雷

十二月三十日

ヒゲ剃れば父に似てきし初鏡

おふくろよ我年金で飯食うな

怒り

一月二日

女学生巫女と成りたるお正月

一月四日

介護士が愛も回して独楽回す

心配ない冬を耐へれば春になる

大人だから

一月七日

しゃっくりに一番効くぞこの新茶

一月八日

食不安このお茶だけはと夏の午後

一月十日

タイヤにもおせち代わりに空気入れ

一月十一日

県外の人もちこち初詣

一月十二日

初旅は人また人の伊勢路へと

風花を横目に眺め帰宅かな

一月十五日

コンビニに恵方寿司あり春近し

一月十八日

亡き父の名前もありし年賀状

一月二十一日

かんぴょうと春を巻き込む恵方巻

一月二十三日

四温光浴びて投票済ませけり

一月二十八日

いきいきと新芽の如く新市長

二月一日

待ちかねし球音弾む春来る

陽を受けて目覚め待ちたるふきのとう

二月二日

介護士も今日は親なり雛の夜

二月三日

人生に恋といふ名の大試験

二月四日

満腹がさせる居眠り春の午後

梅見頃ならば名所へはせさんじ

二月六日

還暦を祝いひ友に春の風

二月十日

春来るぐんぐん背伸び温度計

春眠の目覚めばやはりはずれくじ

二月十一日

良き日和古刹巡りと梅探る

春の午後散歩も兼ねて叔父の家

山門に開き始めの梅の傘

この梅を知らずに逝った友の祖母

二月十四日

改築の風呂場に吹きし春の風

二月十五日

スーパ一の一つのコーナー雛の菓子

二月十七日

楽しんでやがて困らす春の雪

二月二十日

細やかな幸せつかみ春来る

二月二十一日

日脚伸び見知らぬ道を散歩でも

二月二十二日

春風を分けてランナー伊勢路へと

二月二十三日

梅の傘破れて見へし空の青



二月二十四日

旅プランくるってしまひ菜種梅雨

二月二十六日

散歩道梅の香りを持ち帰る

三月一日

春の月乙女の晴着輝かせ

三月二日

青ひ目もピンクに染めるしだれ梅

三月三日

菜の花の香り包まれ新施設

三月五日

四代が男家系やちまき食ふ

三月八日

コンサート成功祝ひ山笑ふ

公園に響く球音春の午後

三月十日

良き日和得て友の子の卒業式

三月二十一日

菜の花の香りが誘ふ外出へ

三月二十二日

ワイパーも楽しく踊る花の雨

少しなら濡れてもみよう花の雨

春嵐上手に避けて買い物へ

三月二十三日

好きですと言われたその日四月馬鹿

三月二十四日

世界一日本野球に桜咲く

想ひ出を残し仕事場引越す